

特集

「若者の労働観と協同労働に触れて」

2015年から2016年にかけて、協同総研の会員の皆さん、日常적으로世話になっている研究者の皆さんにご協力いただき、4大学でワーカーズコープの紹介や働くことについて話をする機会をいただきました。話した際の学生の感想文の中には「『働くこととはなにか』『なぜ働くのか』をあまり考えたことがなく、地域の課題を仕事おこしを通じて解決し、出資・経営・労働する働き方があることに驚いた」という感想が約半分の300枚に書かれていました。残りの半分のうち働くことの意味について「自己実現のため、自分のやりがいのため」「生計(お金)を稼ぐため」「人のため・社会のため」等が書かれていました。私は感想文を読み、働くこと自体を考えることやその機会があまりないことに驚かされたこと、そしてやはり協同労働の協同組合の存在が知られていない現状を目の当たりにしたことが特集テーマに設定する動機となりました。

特集では、現実として特に大学生や主に20代の若者がどのような「労働観」を持っているのかを出発点としました。つまり「なぜ働くのか」「働くこととはどういうことか」を若者にインタビューをする際の基本項目とし、深めることにしました。

特集内容として、5本の記事を掲載しています。

駒澤大学の松本典子ゼミと立教大学の小倉康嗣ゼミがワーカーズコープを題材として調査・研究した報告書を紹介するとともに、当事者として働くことの意味や協同労働に触れて感じたことを語っていただきました。またワーカーズコープで働く20代の職員を中心として、どのような「労働観」「協同労働観」を持っているのかについて、労協センター事業団の浦安地域福祉事業所の若者と座談会を開催しました。そして大学生の労働観を深め、社会とつなげる意味で、立教大学コミュニティ福祉学部インターンシップ・キャリア支援室の職員の立場から藤井満里子氏にご寄稿していただきました。最後に大学生に向けて「ワーカーズコープ」の話をした経験や、特集全体を編集した立場の視点から見てきた学び、そして今後、協同労働の働き方を広めていくために何が必要なのかを分析してみました。

「協同組合で働くこと」について2016年3月号(280号)の当誌でも「インターンシップ in 協同組合」の文書上でも言及していますが、本号では特に若者が働くことをどう考えるのか、そして協同労働に関わりどう変化したのかを会員の皆さんとともに共有したいと考えています。それを通じ、若者が「協同労働の働き方」や「協同組合で働くこと」に興味をもつために、何を考え、何をするのかをおおいに会員の皆さんと議論ができたらと思っています。

(協同総合研究所 相良孝雄)